川越政

拡大対象は海外と地方都市

マンパワー発揮で粛々と

川越社長

製品OEM（相手先ブランドによる生産）も手掛ける中堅生地商社、川越政（大阪市中央区）の川越浩治社長は今後、マンパワーの発揮に努めながら、東京、大阪、地方都市、海外の各所でテキスタイル販売の拡大を狙う。ただし、「拡大よりも継続が優先」として、強引な業容拡大は望まず、粛々と事業を進める考え。

本年度上半期（2016年4～9月）は売り上げ、利益がともに過去最高を記録するなど好調だった。その要因の一つがマンパワーの発揮。同社はテキスタイル、製品で計6部門を設けており、好不調の差はあるものの、それぞれが補完し合うことで最終的に増収増益を果たすことができた。川越社長によると各部門は個性がはっきりしており、時流に合えば伸びるし、その逆もある。時流を見極め、時流に適正な部門に経営資源を投入することで近年業績を拡大。今後も為替やコスト、生地と製品の優勢度合いなどの時流を勘案しながら、最適な経営資源の投入先を見極めていく。

テキスタイル販売では東京での増員を計画するほか、地元大阪のアパレルへの提案強化も図る。加えて、今年初めて開催した九州・福岡展の成功を受け、地方都市での拡販にも力を入れていく。

海外も引き続きの拡大対象で、継続取引ができている欧州、中国のほか、米国や東南アジア市場向けの成長にも期待する。

上半期は過去最高収益

川越政の本年度上半期（2016年4～9月）業績は、売上高が前年同期比8％増の9億1900万円となり、営業利益も15％増、経常利益も8％増と好調に推移した。売上高、利益ともに上半期では創業以来の過去最高。

テキスタイル、製品OEMがともに伸長した。

テキスタイルでは販売先の好調が、製品OEMでは数年前から進めてきた採算性重視の取り組みが増収増益に寄与している。

テキスタイル輸出は円高の逆風の中でも50％増と好調で、欧州メゾン向けや中国向けなどで〝取り組み型〟が深耕、拡大に成功した。

国内テキスタイル販売は合同展や「プレミアム・テキスタイル・ジャパン」などでの新規開拓とともに、丁寧な顧客提案により既存取引先との商量も拡大した。

16～17年度世界綿花需給

綿花在庫を大幅下方修正

中国の在庫消費が進む

日本綿花協会のリポートによると、米国農務省はこのほど今季2016～17綿花年度の世界綿花需給で季初在庫、季末在庫をともに大幅下方修正した。ここ数年、綿花在庫の中心だった中国で備蓄綿花の消化が順調に進んでいるため。

16～17綿花年度の季初在庫は中国。今季の消費高は3550万俵と予想する。最近の備蓄綿花販売数量から見て中国の国内綿花価格に競争力があり、中国への綿糸輸入が抑制されることになる。このため綿花消費高は主要国間でのシフトが起こる。

こうした需給予想を基にすると世界季末在庫は約250万俵下方修正され、8730万俵となる。これは季初在庫から930万俵の減少となり、過去5年間の平均を下回る。

ブラジルと米国の減少が豪州とマリの増加で相殺された。今期の世界作付反別は2940万㌶（前季比3％減）と86～87綿花年度以来の低水準と予想する。代替作物へのシフトでインド、中国、パキスタンでの作付け減少が要因。ただ、インドはイールド（単収）の回復が見込まれる。

日本繊維技術士センター（JTCC）

中は川下のサポートを

日本繊維技術士センター（JTCC）はこのほど、恒例の「JTCCフェスタ」を開催した。今回は経済産業省製造産業局生活製品課の菅野将史課長補佐が講演したほか、乙女文楽座を招いて乙女文楽を公演した。

経産省の菅野課長補佐は「繊維技術とアパレル」をテーマに報告した。歴史や産業政策の成した強みがあり、30年後も産業として生き残ることができる」ものの、川下のアパレル・小売りは主力のアッパーミドル市場がラグジュアリーブランドのセカンドライン戦略とファストファッションの高付加価値化に挟撃されているが、「危機感が希薄で、このままでは10年で日本のアパレル産業はなくなる」と指摘。

カジレーネの「トゥーアンドフロー」

初の直営店舗開設

羽田空港内に28日

北陸産地の織布大手、カジレーネ（石川県かほく市）は28日、トラベルギアブランド「TO&FRO（トゥーアンドフロー）」初の直営店を東京・羽田空港第2ビル駅地下1階に開設する。

梶政隆社長によると、店舗面積は約10平方㍍と大きくないが、京急の改札口からすぐの立地という好条件のため、売り上げはもとより、「ブランドの宣伝効果にも大きく寄与しそう」と期待を寄せる。

クリエーターとの協業の上、店舗を目立たせることとブランドの世界観を表現することを目的に、クリエーターと協業し、専用の音楽を流し、専用の香りを用意する。

軽量トラベルスリッパ

〝軽量・コンパクト〟がコンセプト

トゥーアンドフローは中川政七商店（奈良市）のコンサルティング協力の下、同社が得意とする〝軽量・コンパクト〟をコンセプトにしたトラベルグッズブランドで、2014年12月に販売を開

東和コーポレーション

背抜きタイプ手袋が人気

10月29日「てぶくろの日」でアンケート

作業用手袋の総合メーカー、東和コーポレーション（福岡県久留米市）は、「働く手袋」にもっと関心を持ってもらうことを目的に制定した「てぶくろの日」（10月29日）の活動の一環として、作業用手袋に関するアンケートを実施した。

今回のアンケートはインターネットを利用し、日本在住の15～79歳の男女9945人に事前調査し、「過去1年間に仕事または（掃除・洗濯を除く）家庭での作業で軍手以外の作業手袋を使ったことがある」と答えた人のうち3000人をさらに調査した。

作業用手袋が最も多く使われていた用途は「園芸、家庭菜園」（38・0％）。男性より女性が、また年齢層が高いほどこの割合が高くなり、60代以上の女性では、74・5％を占めた。手袋の種類としては手袋の甲部分を残し、手の平側のみコーティングして通気性を良くした手袋「背抜きタイプ」がこの用途で最も多く使われていた。

作業用手袋を使うときに最も困っていることの1位は、昨年に引き続き「汗で手が蒸れる」（24・7％）ことだった。同時に、「でくれるらいがち意見も数ってはも的にとった。

作業用について也さん、んを挙げ手袋の1日亜分、仕事分というの1が1い、作業しているなった。